

◇展示資料 第1展示室ジオラマ「三内丸山遺跡模型」について◇

1. ジオラマ「三内丸山遺跡模型」について

中央の大型建物や竪穴住居などの建物は、実際の25分の1の大きさに復元されたものである。さらに、出土した遺物から当時の人々の生活を想定し、人物や道具などのジオラマが作成された。人々の様子からは、土器やムシロなどの道具作りの様子、木の実を採集して干したり、調理したりする様子、食料を貯蔵する様子などが想定して再現されており、当時の生活を具体的にイメージできるジオラマである。

ジオラマの復元家屋は、6000年前から4500年前(縄文時代前・中期)までの約1500年間続いた大規模な村の家屋である。

中央の「大型建物復元模型」は、中期の後半ごろのもので、当遺跡において最大規模のものである。床面積は200㎡を超え、通常の住居の約30倍の広さをもつ。同時に建っていた竪穴住居は、少なくとも20棟、多くみつると数十棟に達した。その中には、面積が200㎡以上の大型住居もあった。地面に直接柱をたてた建物(A1およびA2)は、食料の貯蔵施設と考えられる。

(展示室キャプションより一部引用)



青森県三内丸山遺跡の復元家屋
模型縮尺 1/25

2. 歴史の学習におけるジオラマ活用の留意点と有効性

ジオラマ「三内丸山遺跡模型」は、発掘された遺構や遺物を元に、当時の生活空間を想定して作られたものであるが、当時の現実そのままとは言えない。

しかしながら、歴史学習においては当時の生活の様子をイメージさせるのに有効であることから、社会科教科書(歴史分野)にも当時の生活を想定したイラストは積極的に取り入れられている。そして、それを立体化したジオラマは、絵画資料よりもさらに視覚的にイメージ化しやすい。

したがって、あくまでも一つの想像であるジオラマは、「答え」ではないが、学習の導入段階において有効に活用できる。

当ジオラマは、児童、生徒に、およそ5000年前に1500年ほど続いた三内丸山遺跡の人々が暮らした集落について、個々の学習課題をつかむ手立てとしてご活用いただきたい。